

## 打鍼術における鍼具の形状および手技に関する考察

武田 充史<sup>1)</sup>, 石山 良平<sup>2)</sup>

1) 鈴鹿医療科学大学 保健衛生学部 鍼灸学科

2) 鈴鹿医療科学大学 鍼灸治療センター

## 研究報告

## 打鍼術における鍼具の形状および手技に関する考察

武田 充史<sup>1)</sup>, 石山 良平<sup>2)</sup>

1) 鈴鹿医療科学大学 保健衛生学部 鍼灸学科

2) 鈴鹿医療科学大学 鍼灸治療センター

キーワード： 打鍼術, 打鍼槌, 打鍼, 鍼治療, 御園意斎, De Acupuncture, The History of Japan

## 要 旨

日本の鍼術には大きく分けて捻鍼術, 打鍼術そして管鍼術の3つがある。現在の刺鍼法は管鍼法が主体であるが, 打鍼術を用いている鍼灸師も少数存在する。現在使用されている打鍼は元来作られた形状と大きく異なっている。使用される小槌(打鍼槌)については打鍼術の代表的流儀書である『鍼道秘訣集』や他の文献でも記載はなく詳細はよく分かっていない。そこで我々は過去の文献を再検討し, Willem ten Rhyne の『De Acupuncture』および Engelbert Kaempfer の『The History of Japan』に記録がある打鍼槌の寸法を推測した。前者は, 柄の長さは 96mm, 頭部は直径 30mm, 後者は柄の長さが 90mm で頭部が直径 21mm と推測することが出来た。古文献の打鍼手技の図より, 打鍼を把持する手を打鍼槌にて叩き, 治療を行っていた可能性がある。

## I. はじめに

日本で用いられている鍼術は、大きく分けて手技のみで鍼を刺入する中国伝来の捻鍼術、日本独自の管鍼術と打鍼術の3種類がある。管鍼術は江戸初期に杉山和一が広めた、管を用いて鍼を刺入する方法である。<sup>1)</sup> 打鍼術は、御園意齋が16世紀末から17世紀にかけて広めた<sup>2)</sup>とされる小槌（打鍼槌）を用いて鍼を刺入する鍼術である。管鍼法は日本で最も使用されている鍼術であるが、打鍼は、近世に復元を試みた柳谷素霊の図説鍼灸実技<sup>3)</sup>において、使用する者は少ないと述べられており。最も代表的な流儀書である『鍼道秘訣集』（1685）には、打鍼槌および鍼の記載はない。<sup>4)</sup>『鍼灸抜粋』（1680）<sup>5)</sup>や『鍼灸重宝記』（1718）<sup>6)</sup>などには鍼の寸法や図が記載されているが、打鍼用の槌については手技の図に載せられてい

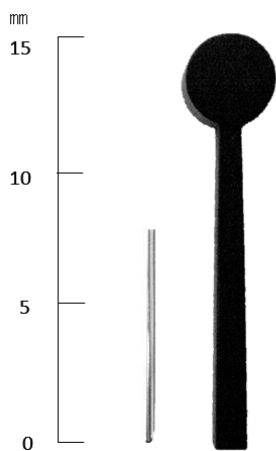


図1 藤本らの打鍼および打鍼槌（著者所有）

る他は説明が一切なく、寸法や形状の詳細は不明である。1970年代半ばに藤本が打鍼を再発掘し、臨床応用し始めた。<sup>7)</sup> 藤本らのグループが使用している打鍼槌および打鍼を図1に示す。藤本は伝統的なスリオロシ型と呼ばれる鋭利にとがった鍼を小槌にて打ち込んだ場合、施術時の患者の苦痛が強かったため鍼を太くしそして鍼先を玉子型にまるめ、それに対応した打鍼槌を作成した。以後、藤本らが行っている打鍼術およびそれを参考にしたものが国内に広まり、打鍼術の復刻は一定なされたと考えられるが、原型に対する研究はあまり行われていない。そこで我々は、原型を推測するために、まずは打鍼術に用いる打鍼槌および打鍼に対する文献調査を行い、考察を行った。

## II. 方 法

本研究では、打鍼法が記載されている鍼灸古文献<sup>8)</sup>である、鍼灸抜粋（1680）<sup>5)</sup>、鍼灸要法（1686）<sup>9)</sup>、鍼灸要歌集（1695）<sup>10)</sup>、広益鍼灸抜粋（1695）<sup>11)</sup>、鍼灸抜粋大成（1699）<sup>12)</sup>そして鍼灸重宝記（1718）<sup>6)</sup>より打鍼槌および打鍼の寸法を調べ、Willem ten Rhyne（1647-1700）の『De Acupunctura』（1683）<sup>13)</sup>および Engelbert Kaempfer（1651-1716）の『The History of Japan』（1712）<sup>14)</sup>に記載されている写実的な打鍼と打鍼槌の大きさの比率より小槌の寸法を算出した。

## III. 結 果

鍼灸古文献においては、打鍼法の記載内容を表1に

表1 鍼灸古文献における、打鍼法の記載内容

書名	刊行年	著者	槌の形状	鍼の寸法	手技の図
鍼灸抜粋	1680	著者不詳	×	○	○
鍼灸要法	1686	岩田利齋	×	×	×
鍼灸要歌集	1695	安井昌玄	×	○	○
広益鍼灸抜粋	1695	李僊校	×	○	○
鍼灸抜粋大成	1698	岡本一抱	×	○	○
鍼灸重宝記	1718	本郷正豊	×	○	○

○は記載があり、×は記載がない。手技の図とは、槌を握って鍼を打っている手技の図である。鍼の寸法については、いずれの文献においても軸が1寸、穂が2寸2分であった。

示す。打鍼の手技を施している図は鍼灸拔萃、鍼灸要歌集、広益鍼灸拔萃、鍼灸拔萃大成そして鍼灸重宝記の5件について確認できたが、槌の形状に関する記載や詳細な図はいずれにも確認できなかった。鍼寸法に関する記載については、鍼灸拔萃、広益鍼灸拔萃、鍼灸拔萃大成、そして鍼灸重宝記にて確認できた。それらの文献では、いずれも鍼の寸法は軸1寸穂2寸2分と記載されていた。

鍼を把持する部分が軸で、その先の鍼体から鍼尖までが穂である。そして鍼の形状は、図2に示す通り先が鋭利に尖ったスリオロシ型であった。太さに関する記述は

なかったが、太いとの記載は確認できた。

『De Acupunctura』と『The History of Japan』に記載されている打鍼道具の図を図3に示す。鍼の長さをメートル法に換算すると96mmであり、それをもとに打鍼槌の寸法を計算すると、前者が柄の長さが105mm、頭部は直径30mm、後者が柄の長さが90mmで頭部が直径21mmと推測された。

古文獻の打鍼手技の図を図4に示す。各文献の図を比較した所、手技の図が記載されていた文献のうち、鍼灸拔萃、広益鍼灸拔萃、鍼灸拔萃大成、鍼灸重宝記については、打鍼を把持する手の第二中手指節関節付近

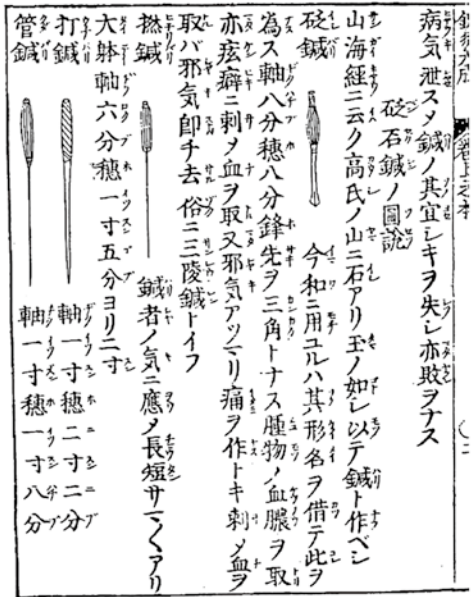


図2 スリオロシ型の打鍼

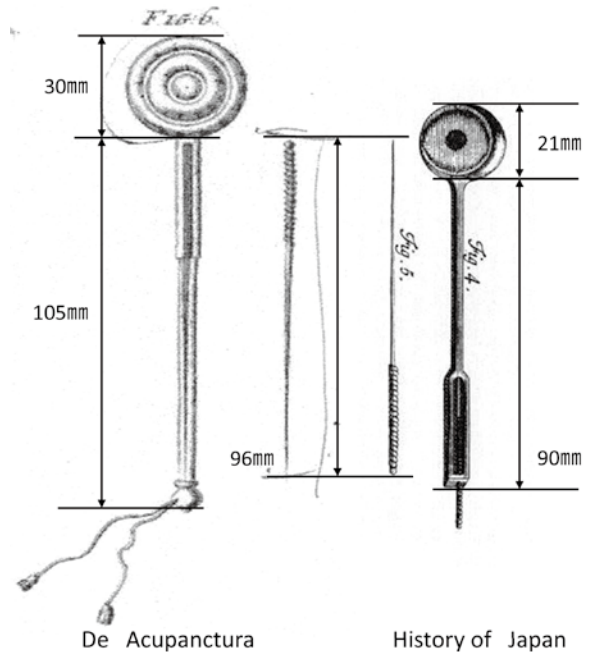


図4 蘭館医が記録した鍼具

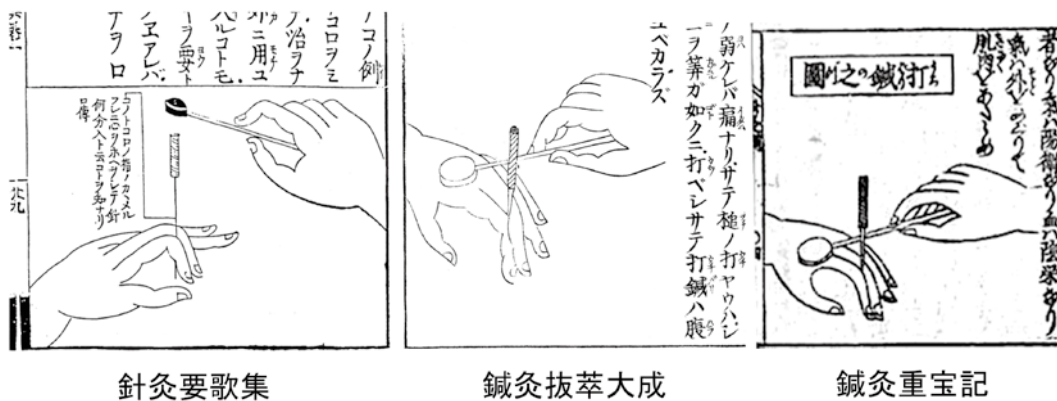


図3 古文獻における打鍼手技の図

に打鍼槌の頭部が描かれ、鍼灸要歌集のみが打鍼の軸を叩くように打鍼槌が描かれていた。

#### IV. 考 察

槌に関する記載は、本研究で調査した文献の文中に一切説明はなく、打鍼の手技の図に書かれているもののみであり、また図は写実的なものでなくディフォルメされており、図から形状や寸法を推測することは難しいと考える。

打鍼に関する記載は、いずれの文献においても軸が1寸つまり30mm、そして穂が2寸2分つまり66mmと明確に書かれており、当時、鍼の寸法は正確に定められて作成されていたと考える。そしてメートル法に換算した長さは96mmであったと推測する。ディフォルメされていると考えられるが、打鍼の形状は、鍼体が順次細く尖端が鋭利であるスリオロシ型と推測される。鍼の太さについては明確な記載がなく現在の資料では推測が出来なかった。

Rhyne は1674-1675年、Kaempfer は1690-1692年にそれぞれ蘭館医として日本へ滞在しており<sup>15)</sup>、彼らの著書に記載された打鍼術の鍼具の図はそれぞれの時期に使用されていたものを写実的に残したものと考える。Rhyne と Kaempfer の日本滞在中に出版されている鍼灸古文献の打鍼の長さは、いずれも同じであるため、打鍼の長さより打鍼槌の形状を推測することは妥当であると考えられる。『De Acupunctura』と『The History of Japan』に記載されていたそれぞれの打鍼追の柄の長さや頭部の直径は、105mm・30mm、90mm・21mm、尺貫法に直すと、3寸5分・1寸、3寸・7分であったと推察される。図を比較すると、打鍼はほぼ同じ形状に見えるが、打鍼槌の大きさや頭部の鍼を叩く部位については形状が大きく異なっているように見える。打鍼槌については、複数の種類が存在したことが示唆される。形状の違いや材質などについては、さらなる調査を行い明らかとする必要がある。

打鍼手技の図における打鍼槌の位置の違いについては、打鍼術の手技において、打鍼を叩く手技の他に、打鍼を把持した手を叩いていた可能性、後者のほうが現存する図が多いためそちらが主流であった可能性がある。さらなる調査が必要であると考えられる。

#### V. 結 論

『De Acupunctura』および Engelbert Kaempfer の『The History of Japan』に記載された打鍼槌のそれぞれの柄の長さや頭部の直径は、105mm・30mm、90mm・21mmと推測された。

打鍼の形状はスリオロシ型で軸の長さが30mm、穂の長さが66mmであり、そして年代による寸法の違いはない。

打鍼術の手技については、打鍼でなく把持している手を叩いていた可能性がある。

#### 文 献

- 1) 中川米造：医療概論，医歯薬出版株式会社，東京，1991
- 2) 高島文一：御菌意齋と打鍼術，自律神経雑誌，1(27)，221-222，1980
- 3) 柳谷素霊：図説鍼灸実技，医道の日本社，東京，1948
- 4) 奥田意白：鍼道秘訣集，1685
- 5) 著者不詳：鍼灸抜粋，1680
- 6) 本郷正豊著：鍼灸重宝記，1718
- 7) 藤本蓮風：弁釈鍼道秘訣集，緑書房，東京，2000
- 8) 山本徳子：資料にみる打鍼法，医道の日本，178-181，2003
- 9) 岩田利斎：鍼灸要法，1686
- 10) 安井昌玄：鍼灸要歌集，壬生書院，東京，1695
- 11) 李僊校：広益鍼灸抜萃，1695
- 12) 岡本一抱：鍼灸抜萃大成，1699
- 13) Willem ten Rhyne: De Acupunctura. R. Chiswell, London 1683 記載の打鍼の図 (<https://www.kyushu-u.ac.jp/oldfiles/magazine/kyudai-koho/No.3/kenkyu.htm>)
- 14) Engelbert Kaempfer: The History of Japan. London 1727 記載の打鍼の図 (<https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/hp/exhibitions/1998/index09.htm>)
- 15) 魯桂珍 Joseph Needham：中国のランセット，創元社，大阪，1989

## **Consideration of Instrument and Procedure in Hammer Acupuncture Technique**

Atsushi TAKEDA, Ryohei ISHIYAMA

---

略 歴

---

**武田 充史**（修士 [鍼灸学]） 鈴鹿医療科学大学 保健衛生学部 鍼灸学科 助教

学歴：

- 平成 8 年 明治鍼灸大学 鍼灸学部 鍼灸学科 卒業
- 10 年 明治鍼灸大学大学院 鍼灸学研究科 博士課程 前期修了

職歴：

- 平成 15 年 埼玉東洋医療専門学校 専任講師
- 16 年 鈴鹿医療科学大学 鍼灸学部 鍼灸学科 助手
- 21 年 鈴鹿医療科学大学 鍼灸学部 鍼灸学科 助教
- 27 年 鈴鹿医療科学大学 保健衛生学部 鍼灸学科 助教

学会活動：

- 全日本鍼灸学会（正会員）
- 日本内分泌学会（正会員）
- 日本薬膳学会（正会員）

主な研究内容：

- 鍼灸刺激が骨代謝へ与える影響
- 夢分流打鍼術の復元